10周年記念号

St. Luke's College of Nursing RCDNP Annual Report 2013

2013年度聖路加看護大学 看護実践開発研究センター報告書

CONTENTS

■ 看護実践開発研究センターのさまざまなはたらき……3
■ 学長・学部長・センター長挨拶……4～7
■ ＰＣＣ実践開発室……8～18

ナースクリニック

✡ 1．聖路加健康ナビスポット　るかなび……9
✡ 2．赤ちゃんがやってくる……9
3．ルカ子母乳育児相談……9
✡ 4．天使の保護者ルカの会……9
5．天使の保護者ルカの会；グリーフカウンセリング……10
✡ 6．乳がん女性のためのサポートプログラム……10
✡ 7．子どもの健康、知ろう、考えよう－子どもの健康を家族と考える学習・交流会－……11
8．リンパ浮腫ケアステーション……11
✡ 9．多世代交流型　デイプログラム　聖路加　和（なご）みの会……11
10．転倒骨折予防実践講座「SAFETY on! プログラム」……12
11．認知症の人のご家族のためのリフレッシュプログラム……13
12．在宅酸素療法を行う方へのテレナーシング……13
✡ 13．高齢者とご家族へオンリーワンの「思い出帳（メモリーブック）」作りプロジェクト……14
✡ 14．ダウン症候群のよりよい養育環境検討会　－ポルカの会－……15
15．更年期を快適に過ごすために（からだとくらしの講座）……15
16．ルカ子・サロン……15
17．心臓リハビリテーションヨガクラス……15

市民健康講座

1．家で死ねるまちづくり「はじめの一歩の会」……16
✡ 2．「自分の体を知ろう」おはなし会……16
✡ 3．聖路加市民アカデミー……16
✡ 4．新健康カレッジセミナー……17
5．中央区民カレッジ　まなびのコース……17
6．中央区民カレッジ　シニアコース……18

✡ 聖路加・テルモ共同研究事業として、テルモ株式会社から助成を受けました。

■ **キャリア開発支援室** …… 19～25

ナーススキルアップ

1．看護管理コンサルテーション…… 20
2．緩和ケアコンサルテーション…… 20
3．在宅看護コンサルテーション…… 20
4．退院調整看護師養成プログラムと活動支援…… 20
5．精神看護事例検討会…… 20
6．がん看護事例検討会…… 21
7．英文献を読もう！パートⅠ　～基礎編～ …… 21
8．英文献を読もう！パートⅡ　～構文理解強化コース～ …… 21
9．不妊症看護認定看護師ポストコース…… 21
10．がん化学療法看護認定看護師　スキルアップセミナー …… 22
11．訪問看護スキルアップセミナー…… 22
12．看護管理塾 …… 23
13．ELNEC-J 聖路加　～すべてのナースのためのエンド・オブ・ライフ・ケア～…… 23
14．クリティカルケア・シミュレーション教育プログラム SCC …… 23
15．日野原重明先生指導下　ナースのための高級診察術 …… 24

認定看護管理者ファーストレベル講習 …… 25

認定看護師教育課程　不妊症看護コース・がん化学療法看護コース・訪問看護コース… 25

■ **研究活動支援室** …… 27

研究相談…… 27
文献検索～準備体操…… 27
臨床疫学研究入門 …… 27

■ **2013 年度教育・研修におけるセンターの活用状況** …… 28

■ **2013 年度看護実践開発研究センター　運営委員会・専任研究員・研究センター事務課スタッフ**…… 28

研究センターのさまざまなはたらき

St. Luke's College of Nursing Research Center
for Development of Nursing Practice

看護実践開発研究センターとは

少子高齢社会で生じている健康問題や社会の動向を、看護の視点でグローバルに捉え、科学的根拠を集積し、市民とのパートナーシップをとりながら、看護の提供方法を開発・研究することを目的とし、開設されました。また、国際的な活動の基軸として、WHOコラボレーティングセンターとしても機能しています。

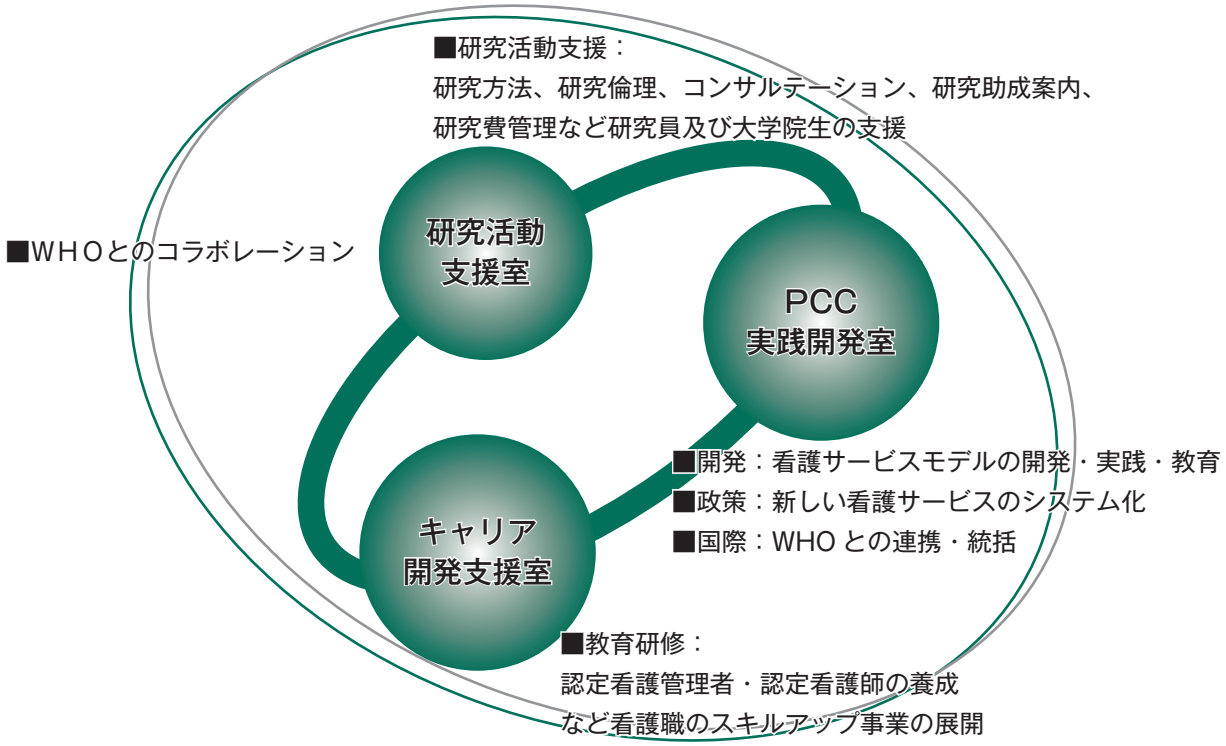
研究と実践をつなぐ

看護学の研究課題は、実践の場から生まれ、そして研究成果は実践の場に還るものでなければなりません。このよい循環をつくる活動を推進いたします。

おもに、看護実践開発に関わる研究と、その支援体制の確立、国際的・学際的な交流事業、市民・専門職に対する生涯学習事業、看護サービスのモデルとなる実践の場の提供などの事業を行います。また、これらの研究事業をつなぎ、成果を蓄積し、臨床の場に提供できるようなデータベースを開発していきます。

組　織

聖路加看護大学の附置機関の一つとして位置づけられ、 センター長のリーダーシップのもとに、「People Centered Care（PCC）実践開発室」「キャリア開発支援室」「研究活動支援室」が機能しています。「PCC 実践開発室」では、さまざまな健康課題をお持ちの個人や家族あるいは地域（集団）に対して、新たな看護を開発することを目的に、市民の皆様とともに協働し研究を推進します。「キャリア開発支援室」は医療現場で活躍している看護職を対象に、より良い実践を目指した教育を行っています。「研究活動支援室」は、研究センターで実践、研究、教育に携わる教員や学生たちが、よりよく活動できるためのさまざまな支援を行っています。



聖路加看護大学看護実践開発研究センターの 10 年

聖路加国際大学　学長　井部　俊子

聖路加看護大学看護実践開発研究センター（以下研究センターと略す）は、「2004 年地下鉄築地駅から徒歩１分のところにある元電通の９階建て（地下１階）のビルを買収して、大学２号館とした」と日野原重明理事長（当時）は報告書に記している。そして、「幸運なことに 2003 年度には本学は Center of Excellence（COE）として文部科学省の大型研究費が支給されることとなり、市民の健康づくりや若手研究者の研究を支援するコンピューターシステムの整備やその他の機器備品が可能となった」のである。

こうして改装を終えた建物は、2003 年４月に聖路加看護大学２号館となり、研究センターの活動拠点となった。研究センターは、少子高齢社会で生じている健康問題や社会の動向を、看護の視点でグローバルに捉え、科学的根拠を集積し、市民とのパートナーシップをとりながら、看護の提供方法を開発研究することを目的とした。研究センターの役割は、①看護実践開発に関わる研究、②生涯学習支援、③看護サービス提供の場、④情報発信、⑤研究支援、⑥国際的・学際的な交流の推進であった。

2005 年度の活動報告書はこのような書き出しで始まる。「1 階には、市民のための健康情報コーナーがあります。からだのこと、心の健康のこと、家族の介護や看護のこと、催し物情報などパンフレットや図書、資料を豊富に準備しています。私たちは名づけて“聖路加健康ナビスポット（るかなび）”と呼んでいます。各テーマ別に企画された“ナースクリニック”では、ナースが来訪者の話に耳を傾けアドバイスをいたします。このたび、駐輪場の改修工事を行い、“ぽるかルーム”という市民のためのサロンが完成し、2006年３月16日に“こけらおとし”をいたしました。」そして、「研究センター催し物スケジュールは年々充実し、おさまりきれないくらいになってきました。うれしい悩みです。」（2006 年度報告書）と続く。2007 年 12 月より、テルモ株式会社の支援を得て、「聖路加・テルモ共同研究事業」が立ち上がり、「新健康カレッジ」として市民向けのセミナーが活発に行われていくこととなった。

2008 年度には研究センターの組織体制の見直しが行われ、 これまでの 6 部門から 3 部門となった。 それらは、 ① People Centered Care（PCC）実践開発部門、②キャリア開発支援部門、③研究活動支援部門である。これらの活動は WHO コラボレーションセンターとしての機能も発揮している。

2011 年度の研究センター報告書は、「きぼうときずな福島県災害支援プロジェクト特別版」となった。研究センターが拠点となって、NPO 法人日本臨床研究支援ユニット（理事長　大橋靖雄）と連携して、被災住民への支援活動を行った。活動領域は、いわき市、相馬市、郡山市であり、延べ 1075 人が被災地支援活動に参加した。

看護実践開発研究センター 10 年の発展はデータによっても示される。2004 年の事業数は 12 件であったが、2013 年には 42 件となり、研究センターの参加者は、543 人から 3943 人となった。文部科学省科学研究費補助金（科研費）の採択率は 56%から 97.1%（全国平均 52.2%）となり、採択件数は 24 件から 47 件となった。科研費の合計は、6104 万円から 7535 万円となった。科研費の最大は 1 億 567 万円（2007 年度）であった。専任研究員は３人から８人となった。客員研究員述べ数は 24 人から 178 人となり、博士研究員述べ数は３人から 20 人となった。

研究センターは、超高齢社会の中で、膨れ上がる医療ニーズに医療者だけでは対応不可能な時代の中で、病を持ちながらも上手に生きていくこと、生活が不自由になっても尊厳を保ちながら生きていくことについて、当事者やその周りにいる人々が智恵を得たり支えあったりすることで主体的にいることができるよう、看護職として何ができるのかを追究し続けている。

2014 年度からは、聖路加国際大学研究センターと教育センターにこのミッションは引き継がれる。

看護実践開発研究センター開設の経緯と今後への期待

聖路加国際大学　看護学部長　菱沼　典子

発端は大井町の土地利用であった。1999 年、大井町の運動場に隣接する土地の購入と、鎌倉の土地半分の売却とセミナーハウスの建て替えが理事会で決定された。大井町の土地利用について、教員は看護の実践施設、研究センター、研修センター、学生寮が欲しいと夢を描いた。2000 年 4 月の教授会で、立教大学との提携、大井町ゆめプロジェクト、WHO 強化プロジェクト、大学院将来構想プロジェクトの 4 つを 2000 年度の活動とすることが決定し、プロジェクトが始動した。2001 年 2 月の教授会に大井町ゆめプロジェクトリーダーの堀内成子教授より、オープン・リサーチセンター構想が報告された。同年 11 月の教授会に、大井町が実働する前に研究センターを立ち上げてはどうかという提案書「聖路加看護大学看護実践研究センター構想について」 が、 学事協議会から出され、2002 年 1 月の教授会で構想委員会が立ち上がり、川越博美教授がリーダーとなった。

2002 年 4 月 23 日、将来構想を共有し、方向性の意識化を図る目的で、理事長、学長と教職員が一堂に会した。大学院将来構想プロジェクト、ふじみ野大井町キャンパス拡充プロジェクト、研究センター構想委員会、情報システム委員会から報告があり、活発な討議があった。ふじみ野大井町キャンパスの建築の実現化が不明なため、その前に研究センターを立ち上げたいという討議の最中、日野原理事長から大井町は遠い、築地に場所はないのかとの発言があった。その場にいた人々は、おそらく皆耳を疑っただろう。かくして大井町はターゲットバードゴルフ場とテニスコートが整備された運動場のままとなり、服部時計店が建て、電通に引き継がれていた今日の 2 号館が生まれたのである。当時の故吉村事務局長のリサーチの元、築地の土地、ビルを見て歩いたことが思い出される。

それから 1 月後の 5 月 23 日の理事会で、研究センター構想案が承認された。同年 7 月の教授会に看護実践開発研究センターの規約案が提出され、その中でセンターの目的は「少子高齢社会で生じている健康問題や社会の動向をグローバルに捉え、看護の視点からいち早く取り組み、科学的根拠を集積し、市民とのパートナーシップをとりながら、看護を提供する方法を開発研究すること」と記されている。9 月の理事会でセンターの開設が承認され、10 月の教授会で構想委員会から開設準備委員会に切り替え、2003 年 4 月 1 日に開設と決まった。川越教授がセンター専任教授と決まり、地域看護学の後任人事が急ピッチで進んだ。ちょうどこの進行と同時に、21 世紀 COE プログラムの申請書を準備するという状況であった。

2003 年 4 月、本館 6 階の一室に研究センターが開設され、運営委員会が発足、2 号館整備のための委員会も立ち上がり、2 号館に大学院と研究センターを配置することが決まった。21 世紀 COE プログラムも、大学院と研究センター、WHO 協力センターとの連携の中で、市民主導型の健康生成を目指す看護拠点として採択された。そして同年 11 月に 2 号館に入居したのである。がこの時、この一連の流れを推進した常葉惠子学長の姿がなかったことは、痛恨の極みであった。夏の休暇中に急逝され、研究センターへの寄付を遺して下さった。看護実践開発研究センター開設記念行事が、2004 年 1 月の創立記念行事に合わせて行われ、2004 年度には専任教員 3 名、職員 1 名が揃い、サービスを始めた。

看護実践、看護研究、看護教育を連動させることにより、看護学の発展に寄与し、もって社会に貢献できるものを作りたい、常勤の教職員を配置したい、他のどこにもない研究センターにしたいという期待を持ってはじめ、ユニークな活動をしてきた 10 年だった。今回の学校法人下における大学と病院の一体化のなかで、これまでの活動は機能に応じて研究センターと教育センターで発展させていくことになった。より広い視野で、市民主導に近づく実践、研究、教育のリンクを先導していくことを祈念している。

2013年1月24日創立記念式典講演より

研究センターPCC 実践開発部部長（旧看護実践開発研究センター長）　有森　直子

聖路加看護大学看護実践開発研究センター(以下センター）は、少子高齢社会で生じている課題を、看護の視点でグローバルに捉え、科学的根拠を集めて、市民とのパートナーシップをとり、看護の提供方法を開発研究することを設立の目的として2003年４月に開設された。同年11月には聖路加看護大学２号館に本拠を移転し本格的に活動を開始した。この年に幸運にも大型研究助成金『21世紀ＣＯＥプログラム『市民主導の健康生成をめざす看護形成拠点』が採択された。

翌年、聖路加健康ナビスポット「るかなび」が始まり、2005年12月には認定看護管理者ファーストレベル教育機関として日本看護協会より認定され、継続教育部門が設置された。さらに2008年６月認定看護師教育課程「不妊症看護」「がん化学療法看護」「訪問看護」の３コースを開講した。2012年４月　これまでは大学学部に位置付けられていたＷＨＯプライマリーヘルスケア看護実践開発協力センターが、組織上、看護実践開発研究センターに位置付けられた。

2010年には内閣府特命担当大臣表彰（子育て・家族支援）を受け、2011年４月には「きぼうときずな　福島県災害支援プロジェクト」を開始した。

センターの設立には、３つの活動が関係している。大井町ゆめプロジェクト、研究センター構想委員会（のちに看護実践開発研究センター準備委員会）聖路加看護大学21世紀COEプログラムである。

夢プロジェクトと、研究センター構想委員会は、別々にはじまり、統合して現在のセンターの開設へとつながった。その中で、センターの名称については、聖路加看護大学が、長く大切にしてきた看護実践を重視し、実践・研究・教育を包含するものであること、また多くの教員が関与できるような包括的な名称を採用することを中心に検討し、また、本学で行われている研究は、看護実践への貢献度が高いことから名称を「看護実践開発研究センター」としたことが2002年度の年報に残されている。

10年間の活動実績の中で、事業数は開設当初の12から42と約４倍に増え、参加者数においては、開設当初の500人から、ピーク時には、10倍にあたる５千人近い人が参加している。数字的にみると、2007年から事業数・参加者数ともに急激な増加がみられるが、COEで、ナースクリニックの看板をあげた活動が、聖路加・テルモ共同研究事業開始により、その活動をより発展できたのではないかと推測される。また、ナースクリニックの活動のみならず、キャリア開発支援室の事業として、医療現場で活躍している看護職を対象により良い実践を目指した教育を行っている。2004年度に４事業39名の参加者でスタートしたナーススキルアップの活動が、2012年度では専門性を活かしたコンサルテーション機能の充実、認定コースのフォローアップコース、事例検討会、クリティカルケア・シミュレーション教育プログラムのようなパラマウントベッド株式会社との共同事業など、著しい展開を示している。中でも日本看護協会の教育機関認定を受けた認定看護管理者講習と認定看護師教育課程はそれぞれ認定看護管理者講習がファーストレベル・セカンドレベル合計で720名、認定看護師教育課程が不妊症看護コース（定員15名)、がん化学療法看護コース（定員30名)、訪問看護コース（定員15名）３コース合計で延べ319名の修了者を輩出している（2014年１月24日現在)。

最後に、センターから、この先の10年を見据えて４つの提言をしたい。

①研究成果をより臨床活用へ

センターの設立時に幸運にも21世紀ＣＯＥプログラムが採択され、大学全体への研究支援体制の整備は、研究員の競争的研究費の獲得に大きく貢献したと思われる。現状において、「看護領域」の研究活動の拡大は、日本でのトップクラスと評価される。この実績をもって、研究成果の臨床活用にむけて、産学協働プロジェクト、政策提言につながるような活動が「聖路加国際大学研究センター」へ引き継がれていくことを期待している。

②ＰＣＣモデルの普及

市民とのパートナーシップについては、特定の疾患や年齢層に特化されない、さまざまな世代と健康レベルを対象にした、ＰＣＣ実践開発部門の広がりから、「健康課題の特性に合わせたパートナーシップの特徴」が研究において明らかになった。これは、全学をあげての協力体制による「聖路加」ならではの成果であると自負している。今後は、「アカデミック・ナーシング・プラクティス」としてのさらなる挑戦としてのフィールドの拡大、市民のヘルスリテラシー獲得とそれに関連する「健康スポット」の運営やボランティアの役割について、病院との一体化により、研究や研究をベースとした実践活動がより推進されることを願っている。

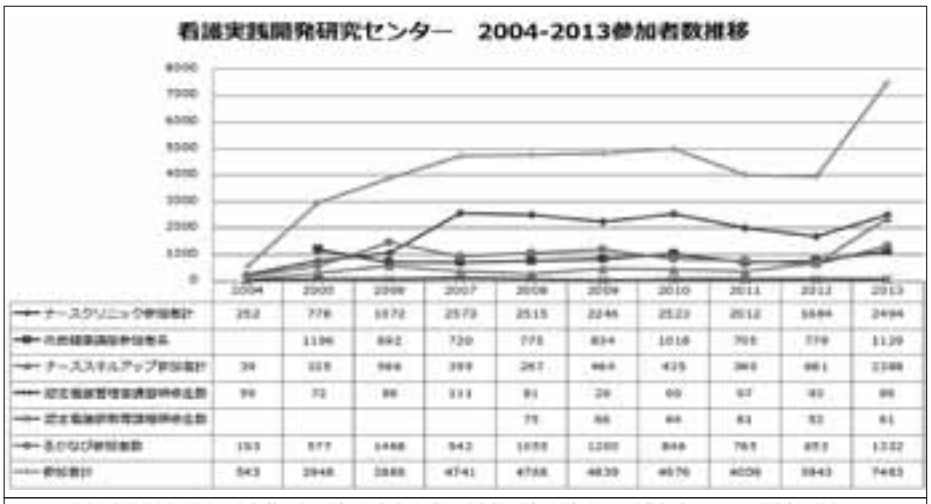
③グローバルな情報発信と学術交流

聖路加看護大学は、ＷＨＯＣＣとしてその実績を認められて委嘱を受け続けてきている。ＷＨＯが、ＰＣＣの重要性を提

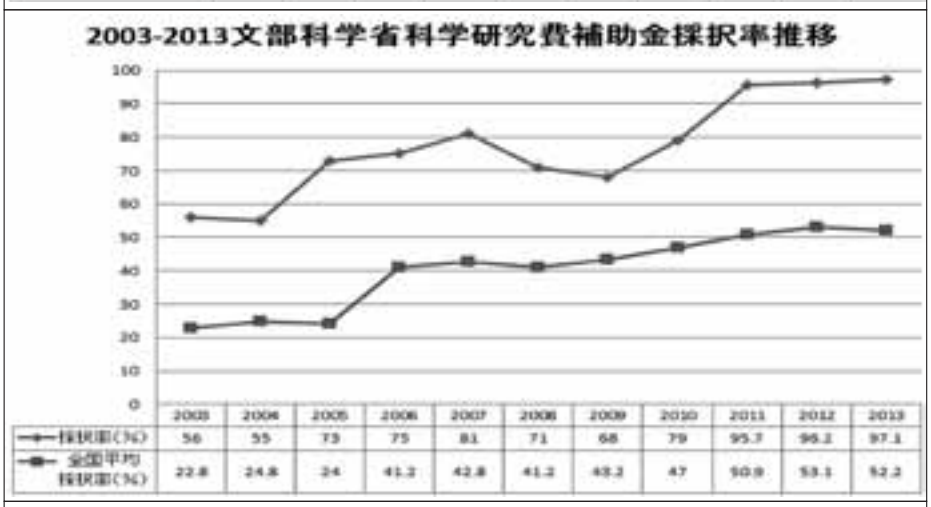
唱するより先んじて研究を進めてきた本学は、ＣＯＥプログラム終了後の成果として日本型ＰＣＣ研究として総括し、ＷＨＯＣＣを有効に活用して世界により効果的に発信し、世界の研究者との協働研究の企画運営を期待している。

④研究者間・学生間の情報交換の機会と場の提供

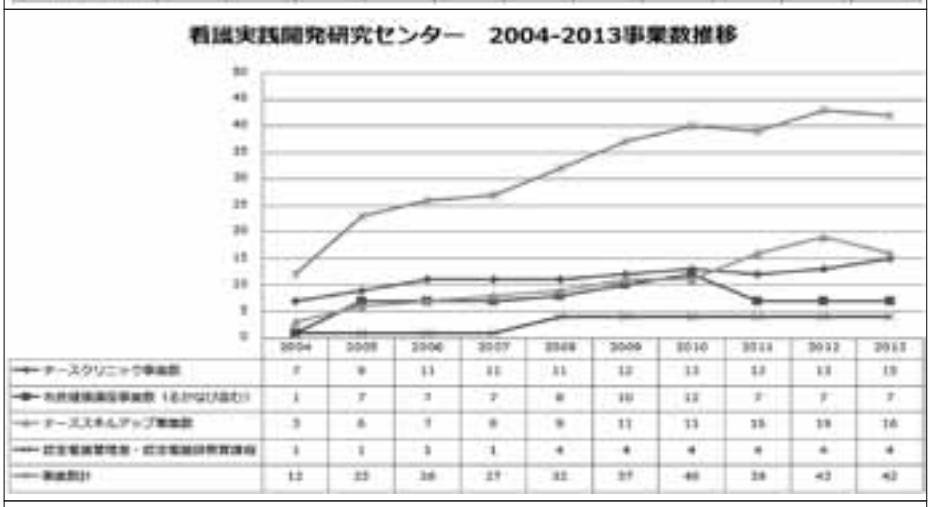
研究センター開設、ＣＯＥプログラムの採択により、若手研究者の育成、ＰＣＣ概念の学部教育への導入による見学実習も実現し教育への還元は、ようやく定着しつつある。今後は、研究成果の臨床応用により学部生・大学院生・認定看護師教育課程受講生が、研究員の研究を身近に感じて参加できるような「学習環境」の整備、そしてカリキュラム運用が「聖路加国際大学教育センター」に求められると考える。



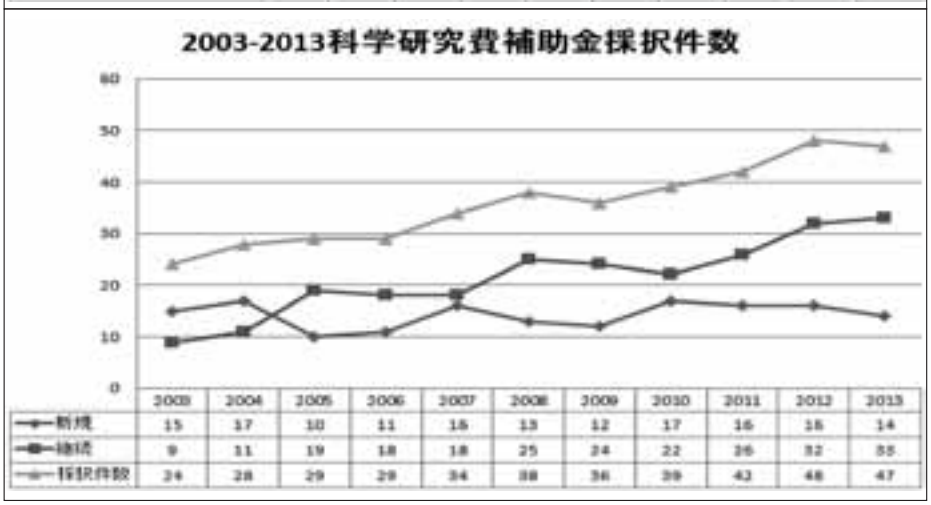
	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
ナースクリニック参加者計	252	776	1172	2573	2515	2246	2523	2512	1644	2494
市民健康講座参加者数		1196	842	720	771	834	1018	701	779	1129
ナーススキルアップ参加者計	39	115	984	389	267	464	435	369	661	1188
認定看護管理者講習修了者数	99	72	88	111	81	29	60	67	42	88
認定看護師教育課程修了者数					79	66	84	81	53	61
るかなび参加者数	153	577	1468	942	1055	1200	849	765	653	1332
参加者計	543	2948	3888	4741	4768	4839	4670	4036	3943	7463



	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
採択率(%)	56	55	73	75	81	71	68	79	95.7	96.2	97.1
全国平均採択率(%)	22.8	24.8	24	41.2	42.8	41.2	43.2	47	50.9	53.1	52.2



	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
ナースクリニック事業数	7	9	11	11	11	12	13	12	13	13
市民健康講座事業数（るかなび含む）	1	7	7	7	8	10	12	7	7	7
ナーススキルアップ事業数	3	6	7	8	9	11	13	15	19	16
認定看護管理者・認定看護師教育課程	1	1	1	1	4	4	4	4	4	4
事業数計	12	23	26	27	32	37	40	38	43	40



	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
新規	15	17	10	11	16	13	12	17	16	16	14
継続	9	11	19	18	18	25	24	22	26	32	33
採択件数	24	28	29	29	34	38	36	39	42	48	47

PCC 実践開発室

【ナースクリニック】

■「るかなび」

事業主：有森 直子　開催日　8 月・年末年始・年度末を除く月～金　10 ～ 16 時：　参加人数：1332 名

るかなびの事業は、 研究センターの基幹事業であり、 聖路加・ テルモ共同研究事業の一環とした活動である。2013 年度は、るかなびボランティア 46 名（市民ボランティア 26 名、専門職ボランティア 20 名）と、運営会議メンバー 10 名（コーディネーター 3 名、司書 1 名、看護系教員 5 名、事務 1 名）で運用した。

一般市民向けには、健康相談・健康測定（骨密度・体脂肪・血圧）を 191 日／年、開催し 693 名利用者した。また、ランチタイムミニ講座・ミニコンサート 10 回開催し 489 名の来訪者があった。さらに、CHADO（ティーサロン）11 回開催し 150 名が来訪した。るかなびは、大学図書館の分室機能を持ち、闘病記・パンフレット類、図書の利用、インターネット検索の場を提供した。るかなびボランティア向けには、ボランティアミーティング 7 回、るかなび全体会 1 回、ボランティア勉強会 8 回。闘病記ブックリストミーティング 7 回の活動を行った。広報活動としては、47 施設の協力施設にチラシを掲載し、さらに中央区健康福祉祭りや、白楊祭への参加を通して行った。

教育の場としては、学部 1 年生・学士 17 回生の PCC 概論で延べ計 98 名、認定看護師教育課程訪問看護コース研修生の実習で 26 名を受け入れた。また、るかなび闘病記文庫の利用で学部生、院生等に 157 冊を貸し出した。また、専門看護師である看護教員に実践活動の場として提供した。研究活動としては、骨粗鬆症予防の教材における活用評価をまとめ学会発表を 2 件行った。

今後も、るかなびは、市民のニーズに沿った活動を提供し続けられるよう、市民とともに、その時代が求めるケア形態を模索し続けていきたいと考える。

■「赤ちゃんがやってくる」

事業主：片岡 弥恵子　開催日：8 回／年　参加人数：85 家族（248 名）

「あかちゃんがやってくる」は、新しく子どもが生まれる家族、特に兄姉になる子どもたちに対して、「あかちゃんが生まれるってどういうこと？」「なぜ、あかちゃんが生まれるの？」「あかちゃんとは？」などについて学習し、新しく家族を迎えるための準備クラスである。兄姉になる子どもたちが、新しい生命の誕生を通じて、自分の生・性を大切にすることができるよう働きかけると同時に、母親や父親が、今後子どもたちと性に関する話ができるきっかけとなっている。

■「ルカ子母乳育児相談室」

事業主：永森 久美子　開催日：来所；月・水・金　訪問；随時　参加人数：90 名

本年度から聖路加産科クリニック内の母乳相談室での来所での開催日を月曜日のみに変更したが、参加者数に大きな変化はなかった。訪問での相談は例年通り随時に行い、主な訪問先は中央区、江東区、品川区であったが、台東区や千代田区へ訪問することもあった。

受付方法は電子メールで行い、その後担当者から連絡をして相談日時を調整した。電子メールを確認するまで時間を要することがあるが、センターへ直接問い合わせがあった場合は、センターから担当者に連絡してもらい、相談日時を調整することもあった。

対象は、出産後退院してすぐの母子から 24 ヶ月の母子で、相談内容は、母乳分泌に関する相談、乳腺炎等の乳房トラブル、卒乳・断乳のケアが多かった。相談中に上の子とのかかわり、母体や児の体調、寝かしつけや離乳食の進め方、仕事への復帰などに関する相談になることもあった。

本事業を知ったきっかけは、インターネットが最も多いが、特に経産婦さんの口コミやリピーターもこれまで以上に増えてきている。相談件数は多くはないが、訪問ができる母乳相談のニーズがあることを感じている。

聖路加産科クリニックでの相談の際の連絡方法が課題であったが、当日のスタッフに電話連絡するように話しあった。

■「天使の保護者ルカの会」

事業主：蛭田 明子　開催日：10 回／年　参加人数：77 名

2013年度は、計8回のお話会、及び2回の手作りの会のイベント（株式会社テルモからの資金援助）を開催した。

今年度は遠方（四国や、関東圏内でも２時間以上かかる等）から来る方も多かった。遠方から来る参加者は、住居の近くにこうした支援の場がない家族であり、今後全国的に地域で活用できる継続的 / 長期的なグリーフの支援体制が整っていくことが望ましい。地域とどう連携していけるのか、次年度考えていきたい。

今年度のトピックスとして、人工死産の会の開催について改めて注目したことが挙げられる。ここ数年、死別の種類に枠をもうけない通常のお話会と、人工死産の体験者のみのお話会を分けて実施しているが、人工死産の会への参加者は非常に少ないため、年に１回の開催としていた。しかし、年に１回という少なさから、通常のお話会に参加してみたものの、人工死産ゆえに感じる他の参加者への気おくれがあり、思うように話ができなかったというケースがあり、また、お問い合わせを頂いたものの、ごく少人数でお話ができる他のグループを紹介したケースも複数あった。一方で、胎児診断が進む中、人工死産を選択する家族に対するケアに悩んでいるという臨床家の声も今年はよく耳にした。今年度の活動の中で、こうした体験者及び臨床家双方の声がリンクし、参加者は少なくても、人工死産を選択した家族への支援の場はもっと必要だと考えるに至った。そこで、次年度は人工死産の体験者のためのお話会を２回に増やしてみることとした。

＜業績＞

北園真希、蛭田明子、石井慶子、太田尚子、勝又里織、堀内成子：妊娠継続を見送った女性へのケア、助産雑誌、67（5）、387-390、2013

■「天使の保護者ルカの会；グリーフカウンセリング」

事業主：堀内 成子　開催日：毎週水曜日　参加人数：26 名

利用 21 件の内訳は、女性 20 名　男性６名、このうちカップルは５組。利用者満足度調査（6 項目・10 段階評価）によれば、各設問の平均値は、8.85 ～ 9.54 であった。総合満足度は、9.23 である。

相談に至る経緯は HP からが最も多い。相談内容（来談主訴・複数回答）では、「児を失った喪失体験」が最も多く（14 件）、次いで心理（9 件）、家族（7 件）、夫婦関係（4 件）であった。中には複数回の喪失（流産、死産、事故）による悲嘆の深いケースがあった。また、人工死産後の相談が増加しており、いずれの相談者も、自責・罪悪感を抱え、体験を周囲に話せず孤立していた。人工死産であるため、医療者から冷たい態度をとられた例もあった。多くの場合、次の妊娠・出産への希望や期待が語られる。しかし、複数回の喪失の後では、不安が強く、不育症検査・出生前診断・遺伝カウンセリングの情報を求めている。

相談者たちの語りによれば、医療機関の産後のケアでは、入院中については、適切なケアは進展しており、不満の声は少ない。しかし、退院後の悲嘆を伴う心身状態の情報や相談先・セルフヘルプグループの情報など、患者にとって必要な情報提供は、まだ十分とは言えず、自らがネットで探索している現状があり、これらの情報提供も行っている。

■「乳がん女性のためのサポートプログラム」

事業主：細田 志衣　開催日：9 回／年　参加人数：280 名

2013 年度は、７回の小グループでの話し合いと２回の学習会、合わせて９回のサポートプログラムを開催した。体験を分かち合う話し合いでは、診断後間もない時期、個々の治療内容に関連した悩み、就労に関する悩みなど様々なテーマを設けた。学習会では、看護師でヨガインストラクターでの鈴木陽子氏（聖路加看護大学看護実践開発研究センター客員研究員）による「乳がんサバイバーのためのリラクゼーション＆ストレッチヨガ」（講義に加え、座った姿勢ででもできるヨガの体験）と南村真紀医師（聖路加国際病院乳腺外科）による「乳がん患者のサバイバーシップ」を開催した。数年に渡り定期的に参加するメンバーの中には、自主的に新しい参加者が参加しやすい雰囲気をつくるように心がける姿が見受けられた。本年度は、2004 年 11 月より約 10 年間という長期間に渡り運営してきたサポートプログラムのプロセス評価実施のため 2013 年 11 月から 2014 年３月にかけて、参加者を対象とした質問紙調査を、本学の倫理審査委員会の承認を受けて実施した。調査結果はまとめて公表する予定である。なお、次年度からは実践に根づいた活動をめざすため、聖路加国際病院内で本事業を継続していく予定である。

サポートプログラム参加者のコアメンバーから出されたアイディアによりサポートプログラムの出張所的役割を果たす「聖路加スマイルコミュニティ」は、2008 年より体験者がボランティアとしてピアサポート活動を実施している。聖路加国際病院ブレストセンタースタッフの協力のもと病院内に活動場所を移行し２年が経過した。院内でのピアサポートの質向上に向けてミーティングを行ったりブラッシュアップ研修を行った。

■「子どもの健康、知ろう、考えよう－子どもの健康を家族で考える学習・交流会－」

事業主：及川 郁子　開催日：5 回／年　参加人数：199 名

2013 年度は 5 回実施した。テーマは、6 月「虫歯予防は、ここまでできる　～永久歯を一本も虫歯にしないために～」、7 月「子どもの事故と応急処置・心肺蘇生法　～大切な命を守ろう～」実技あり、10 月「学校・保育園での食物アレルギー」、11 月「予防接種で防げる病気」、1 月「気になる子どもへの支援」である。子どもたちの健康問題や季節に合わせ、専門の講師を招いて講義を 60 分～ 90 分程度行い、その後参加者との質疑応答を通しての交流を図っている。ここ数年、家族の希望もあり、内容が一定化してきている。

参加者は中央区在住・在勤である。夕方の2時間であるが、託児を行っていることもあり、親子の参加、リピーターが増えている。参加者の意見交換は活発であり、子どもの相談も多い。子育て中の親の参加が多いことから、育児に悩んだり、困ったりしていることを解決できる場として、育児不安解消の一端を担っている。

また、保育園関係者も多く、日頃の子どもたちの関わり、健康管理について最新の情報を得たいというニーズがあることがわかる。

参加者のアンケートからは、学習内容のわかりやすさ、講師や参加者が身近に話せて堅苦しくないこと、運営や全体の雰囲気がよいことなど、肯定的評価が挙げられている。しかし、親のニーズと専門職のニーズにやや違いが見え始め、今後の検討課題である。

また、回数を重ねるごとに託児利用の希望が増え、断っている状況である。多くの参加者の要望に応えたいが、リスク管理等の問題もあり、引き続き検討課題である。

次年度は、開催予算の目途が立たないため、ナースクリニックの運営方法を検討して進めることにしている。

■「リンパ浮腫ケアステーション」

事業主：前田 邦枝　開催日：毎週火曜日　参加人数：140 名、研修会参加者 28 名

本ステーションではリンパ浮腫ケアをもつがん患者を対象に、後藤学園・聖路加国際病院と協力体制を組み事業を開催している。

個別指導としては、リンパドレナージ等のケアの提供や、自宅でのケア継続のためのセルフケア指導、弾性着衣の選択・使用方法・療養費申請の相談等を行い、のべ 111 名が利用された。また、乳がん術後で症状が軽症、もしくはリンパ浮腫の予防が必要な方を対象に、リンパ浮腫予防や早期発見のためのセルフケアグループ指導を行い、のべ 29 名が利用されている。

さらに、本学大学院修士課程がん看護・緩和ケア上級実践コースの演習や、聖路加国際病院でのリンパ浮腫ケアに関する見学実習の受け入れを行うほか、8 月には臨床看護師やそのほか医療職種を対象にリンパ浮腫ケアに関する基礎知識とセルフケア指導に関する研修会を開催し、リンパ浮腫に関する知識の普及とチーム医療実践のためのモデル形成を目指し看護師・医療者教育活動を行っている。

＜業績＞

大畑美里、中曽根朋子、井上貴久美、金井久子、細川恵子、前田邦枝、細田志衣、佐藤佳代子、米原恵理子、本田晶子：乳がん女性のリンパ浮腫に対する圧迫療法を行うことによる生活上の影響とその対処 . 第 28 回日本がん看護学会学術集会口演発表（査読あり），2014，新潟.

■「多世代交流型デイプログラム　聖路加　和みの会」

事業主：亀井 智子　開催日：毎週金曜日　参加人数：のべ 604 名

2007 年 4 月に本プログラムを創設し、7 年目の活動となった。PCC による高齢者と子どもを中心とした都市部においての世代間交流プログラムを週 1 回継続的に運営した。

登録高齢者は 18 名、小学生は 8 名である。また運営には地域ボランティア 6 名の協力を得た。プログラムに参加した認知症高齢者は、全員が介護保険制度によるサービスに加え、本会を利用していた。虚弱高齢者では、健康状態や心身状態の維持が図られていた。独居高齢者では、他者・他世代との交流による会話の質の向上などが認められた。小学生にとっては、高齢者との交流による知恵の伝承が観察された。参加満足度（0～10ポイントのVAS）は、高齢者平均 9.3 ポイント、子ども平均 8.0 ポイントといずれも高かった。

＜業績＞

論文

・亀井智子、山本由子、梶井文子：聖路加式世代間交流観察（SIERO）インベントリーの開発と信頼性・妥当性の検討、聖路加看護学会誌 ,17（1）、9-18、2013.

・亀井智子：都市部在住高齢者と子どもの世代間交流プログラム：世代間継承からソーシャルキャピタルへ、看護、65（9）、87、2013.

学会発表等

・糸井和佳、亀井智子：地域世代間交流観察尺度 CIOS-E（暫定版）を用いた世代間交流プログラムの実施場所別の交流評価、聖路加看護学会第 18 回学術大会講演集、36、2013. 東京。

・亀井智子：シンポジウム 1 世代間交流で変えるこれからの社会シンポジスト、日本世代間交流学会第４回全国大会要旨集、11、2013. 東京 .

・梶井文子、亀井智子、山本由子、千吉良綾子：多世代交流型デイプログラムに参加した高齢者と子供の満足度・交流の評価、日本世代間交流学会第４回全国大会要旨集、38、2013. 東京 .

・山本由子、亀井智子、梶井文子：世代間交流観察尺度（SIERO インベントリー）の開発と信頼性・妥当性の検証、日本世代間交流学会第４回全国大会要旨集、40、2013. 東京 .

記事

・超高齢社会における世代間交流をテーマに日本世代間空流学会が全国大会を開催、日本公衆衛生雑誌、61（1）、60、2013.

■「転倒骨折予防実践講座 SAFETY on」

事業主：亀井 智子　開催日：6 回／年　参加人数：のべ 192 名

第 1 回：問診、心身の計測（BMI、開眼片足立ち時間、骨密度、大腿周囲計長、10m 歩行時間、QOL26）、転倒リスクアセスメント、小講義「高齢者の転倒の疫学」、運動プログラム、茶話

第 2 回：問診、小講義「高齢者の食事と栄養」、運動プログラム、茶話

第 3 回：問診、小講義「自宅の安全対策」運動プログラム、茶話

第 4 回：問診、小講義「足の手入れ」、運動プログラム、修了証授与

第 5 回（12 週後フォローアップ）：問診、心身の計測、運動プログラム、教材の活用状況グループ討議、茶話

第 6 回（52 週後フォローアップ）：問診、心身の計測、運動プログラム、教材の活用状況グループ討議、茶話

今年度の参加登録者は計 51 名で、午前コース 26 名、午後コース 25 名となった。第 5 回までの全講座参加者数は午前コース 23 名、午後コース 22 名であった。12 週間の追跡期間中の転倒者数は午前コース 2 名（8.7%）、午後コース 1 名（4.5%）であったが、本事業は 3 年間継続する計画であるため、これは単年度の参考値である。

小講義への満足者割合は、「良かった」が両コースとも 97 ～ 100%を占め、運動プログラムの強度は、「軽い」24 ～ 28%、「適当」64 ～ 67%、「強い」4.7 ～ 11.5%であった。講座全体の満足度（0 ～ 10 の VAS）は午前コース、午後コースともに 9.2 と高かった。

＜業績＞

論文

・亀井智子（2013）. 在宅高齢者への転倒予防の知識の啓発　高齢者への自宅の安全対策の教育とその効果，リハビリナース，6（3），275-280.

・杉本知子（2013）．転倒・転落の個別リスク分析と安全な環境づくり，高齢者安心安全ケア実践と記録，10（4），21-25.

・Mizukami S，Niino N，et al（2013）．Falls Are Associated with Stroke，Arthritis And Multiple Medications among Community-Dwelling Elderly Persons in Japan．Tohoku J Exp Med．231（4），299-303.

学会発表

・亀井智子、梶井文子、千吉良綾子、糸井和佳、入江由香子、杉本知子、新野直明（2013）、地域在住高齢者を対象とした包括的転倒予防プログラム「SAFETY on!」の開発と転倒予防効果検証のためのランダム化比較試験研究プロトコル , 聖路加看護学会第 18 回学術大会講演集、35.

・梶井文子、亀井智子、千吉良綾子、山本由子、新野直明、入江由香子、糸井和佳（2013）、地域在住高齢者の転倒予防実践講座受講前後の食事・栄養に関する知識・食行動の変化、日本公衆衛生雑誌、60（10）、406.

・入江由香子、亀井智子、梶井文子、千吉良綾子、山本由子、新野直明（2013）、地域在住高齢者への転倒骨折予防実践講座が体力に及ぼす影響－転倒経験に着目して、日本公衆衛生雑誌、60（10）、406.

・千吉良綾子、亀井智子、梶井文子、糸井和佳、山本由子、新野直明、入江由香子（2013）、転倒予防実践講座におけるフットケア講義受講者のフットケアに関する知識と行動の変化、日本公衆衛生雑誌、60（10）、407.

記事

・亀井智子（2013）、転倒予防医学研究会第９回研究集会シンポジウム記事、身体教育医学研究、14（1）、43.

■「認知症の人のご家族のためのリフレッシュ・プログラム」

事業主：梶井 文子　開催日：8 回 / 年　参加人数：のべ 70 名

1．ミニレクチャー(30 分)：認知症の理解（病気と症状）、認知症の人への接し方、在宅生活内での認知症の方への工夫、病院や施設利用でスタッフへの伝え方とその内容等を行った。

2．リフレッシュ・プログラム：フラワーアレンジメント 1 回

3．話し合いのテーマ（1 時間）：日頃の介護で困っていること、日常生活の介護の工夫、皆に活用したもらいたい情報等について話し合った。互いの悩みへの他者からのアドバイスも随時行われた。

参加家族は、認知症やケアに関する知識や情報を得ることだけでなく、自らの思いや悩み等を語り、他の家族・介護者と同じ思いを共有し、具体的な解決方法の提供によって自分の介護に生かせる情報を取り入れていた。気分転換に行ったフラワーアレンジメントは、介護者本人だけでなく、認知症の方への好影響もあったことが振り返りの発言にみられた。事業者は時間外に個別の電話相談に応じ、またファックスでの情報交換等も行った。以上から本事業への参加満足度は平均 9.56 と非常に高かった。本プログラムは、家族介護者の日々の精神的健康の維持や認知症の介護・ケア方法の向上のために必要な場であると考えた。

＜業績＞

1. 梶井文子、山本由子、亀井智子．認知症家族介護者プログラム参加者の在宅ケアとサービス利用に関する支援ニーズ．第 16 回日本在宅ケア学会学術集会
2. 梶井文子、山本由子、亀井智子．認知症高齢者の家族介護者のための看護支援プログラムとプログラム運営上の配慮．日本地域看護学会第 15 回学術集会
3. 梶井文子、亀井智子、山本由子．認知症者の家族介護者のためのリフレッシュ・プログラム参加前後の介護負担感・ストレス方略に関する行動の変化．第 17 回聖路加看護学会学術大会

■「在宅酸素療法を行う方へのテレナーシング」

事業主：亀井 智子　開催日：毎日　参加人数：0 名

2013 年度はタブレット型端末を用いた新たなテレナーシングシステムを開発している。また、計測した血圧ほかのデータを無線通信により端末に取り込んで、モニターセンターに送信するシステムも開発中である。

これまでの研究の成果をもとに「テレナーシング実践ガイドライン」を刊行し、併せて、看護師向けのテレナーシングセミナーを開催した。14 名の参加者があり、テレナーシングの方法や開始時の準備、遠隔コミュニケーションの方法の演習など、テレナーシングの実践を理解するための機会を提供し、参加者の満足度も VAS 9.0 点（0～10 点の分布）と高く、セミナーの構成は良かったと考えられた。今後もテレナーシングのわが国での普及を目ざしていく。

＜業績＞

論文

・Tomoko Kamei, Yuko Yamamoto, Fumiko Kajii, et al. Systematic review and meta-analysis of studies involving telehome monitoring-based telenursing for patients with chronic obstructive pulmonary disease. Japan Journal of Nursing Science, 10（2），180-192, 2013. DOI: 10.1111/j.1742-7924.2012.00228.x

・Tomoko Kame.. Information and communication technology for home care in the future. Japan Journal of Nursing Science, 10（2），154-161, 2013. DOI: 10.1111/jjns.12039

・亀井智子． 高齢者看護の新たな展開－高齢在宅療養者へのテレナーシングの活用と効果－，日本老年医学会雑誌，51（1），42-45,2014.

学会発表等

・亀井智子．テレナーシングの方法：導入時に焦点をあてて，特別企画（1）遠隔医療における看護職の役割、日本遠隔医療学会 Spring Conference 2014,3,2014. 東京．

・亀井智子．シンポジウム　在宅慢性呼吸不全患者のためのテレナーシングの実践的導入とガイドライン作成，日本医療マネジメント学会第 15 回学術総会シンポジウム ,14（Supple），158，2013. 新潟．

・亀井智子． 高齢者看護の新たな展開－高齢在宅療養者へのテレナーシングの活用と効果－第 28 回日本老年医学会総会シンポジウム 1.50（Supple）,5,2013. 大阪．

・亀井智子，山本由子，中山優季．COPD HOT 患者のためのテレナーシング実践ガイドラインの開発，日本呼吸ケア・リハビリテーション学会第 23 回学術集会 ,23（Supple）,130s,2013.s4g）. 東京．

・Tomoko Kamei, Yuko Yamamoto, Fumiko Kajii, Yuki Nakayama, Nobuaki Kamei., Development and implementation of evidence-based guidelines for telenursing practice for patients with chronic obstructive pulmonary disease in a Japanese setting, The 18th ISfTeH International Conference in Japan Proceedings, 86, 2013. Takamatsu.

・Yuko Yamamoto,Tomoko Kamei, Fumiko Kajii, Yuki Nakayama., Study of telenursing system that promotes self-care of patient with chronic obstructive pulmonary disease, The 18th ISfTeH International Conference in Japan Proceedings, 87, 2013. Takamatsu.

・亀井智子、山本由子、中山優季、蝶名林直彦 .COPD 在宅酸素療法患者を対象としたテレナーシングとガイドライン開発，日本呼吸ケア・リハビリテーション学会第 1 回関東地方会，12，2014. 東京.

書籍

・聖路加看護大学テレナーシング SIG 編．テレナーシング実践ガイドライン，ワールドプランニング，東京 .2013.

研究成果 Home page

http://www.kango-net.jp/project/04/04_2/pdf/20131214.pdf

■「高齢者とご家族へオンリーワンの「思い出帳（メモリーブック）」作りプロジェクト」

事業主：千吉良 綾子　開催日：毎月第 1、3 土曜日　参加人数：のべ 10 名

参加者は本学看護実践開発研究センターの他プログラム参加者（家族）、および訪問ステーション看護師からの紹介による２組であった。希望により担当者が訪問して実施した。対象者は 90 歳代の女性であった。まとめにあたる第 4 回目のセッションでは、N 式老年者用精神尺度より軽度認知症の高齢者から「話したいことが湧いてきた」「自分も捨てたもんじゃないと思えた」、中等度では「あら、これ、私、私だわ」「何でも自分でやってみたの、頑張ってきました」などが語られ、メモリーブックに書き入れて渡した。介護者である家族からは「苦労してきたんだな、と見直しました」「怖い、頑固な人です。こんなに笑うんですね」などの感想が聞かれた。プログラム参加満足度は 9.0 と高かった。

高齢者においては、身体的な事情からもセンターに通うことが難しくなるため、要する時間とセッション間隔調整の対応が必要である。

（研究業績）

・山本由子、亀井智子、梶井文子（2013）．介護者に認知症高齢者理解を促すコミュニケーション媒体としてのメモリーブックの可能性．聖路加看護学会第 18 回学術大会講演集．29．｛示説発表｝

■「ダウン症候群のよりよい養育環境検討会　―ポルカの会―」

事業主：有森 直子　開催日：9 回／年　参加人数：71 家族、スタッフ（ボランティア含む）48 名

2013年度は、「ダウン症候群の成育に関するプログラム」が発足して２年目の活動となり、９回企画を実施した。

テーマは４月「大浜先生の体操」・５月「音楽」・６月「フットケア」・７月「動作法」・９月「美術」・10 月「性教育講演会」・11 月「音楽」・１月「モンテッソーリ教育」・２月「音楽」であり、各回１～２時間の親子参加の活動を行った。６月、９月はポルカの会会員の要望から企画した初めてのテーマとなり、会員と講師とともに企画から協働することで中央区ダウン症候群親の会とのパートナーシップの実践の場となり、会員からも好評であった。

また、看護学生がボランティアとして積極的に参加したり、卒業論文のテーマとしてダウン症候群児の地域でのサポートの窓口をまとめたガイドマップの作成をする等、学生の学びの場ともなった。

参加者のアンケートからは、子どもたちが楽しんで参加し親子の交流の場になり互いに支えあっていると感じていること、親子で関心のあるテーマなので会を継続して欲しい等、肯定的評価が挙げられている。

今後は、子どもたちの特徴の知識や経験豊かなボランティアを育てていくこと、ダウン症候群児の兄弟や他の症状をもった児も対象としていくこと、会員と看護職等の専門職や看護学生がより協働し企画を充実していくことを課題としたい。

■『「更年期を快適に過ごすために」（からだとくらしの講座）』

事業主：片岡 弥恵子　開催日：4 回／年　参加人数：32 名

まず、更年期および更年期障害についての講義を行い、参加者の理解を促した。続いて、簡単ヨガストレッチおよびグループワーク形式での更年期時代の暮らし方についてディスカッションすることを通して、自分の生き方を新しく創造していくことを目指した。グループワークを行うことで、仲間づくりができるように支援した。更年期の理論や対処方法、良い病院の見分け方に関する具体的な指導、更年期で体験する身体の不調や心の不調を解消できるようなヨガストレッチを自宅で一人でもできるような方法を取り入れ工夫を行った。

■「ルカ子・サロン」

事業主：森 明子　開催日：10 回／年　参加人数：延べ 106 名

本年度は 10 回、原則第３土曜日の 13：00 ～ 15：00 に開催した。５～６名を１グループとして自己紹介から始め、特にテーマは決めずに参加者の関心に沿って自由に話してもらう形であった。参加者が脅かされずに話せるよう各グループに１名以上のファシリテーターを配置した。11 月の会では不妊症看護認定看護師教育課程の研修生が不妊の自助グループと協力し、「自分たちで選ぼう不妊治療」というテーマで不妊に悩む女性やカップルを対象に小集団指導を行った。

参加人数の一回の平均は 9.2 人（11 月を除く）であり、参加者の年齢は 30 代から 40 代前半の参加者が 98%を占めていた。催し物案内（冊子）やセンターの WEB サイト、運営者の既知の当事者のブログなどで広報しており、参加者のほとんどはブログや WEB サイトといったインターネットの情報から会の開催を知って来所していた。会への参加動機は「情報収集・交換」「仲間と話したい」「気持ちの整理をしたい」といった内容が多く、事後アンケート回答者の全員が「満足」「ほぼ満足」と回答し、95%以上はまた参加したいと回答していた。今後希望する内容としては妊娠に向けた体づくりや実践に携わる看護師による講義や個別相談会の開催を望む声もあり、来年度は不妊症看護 CN の協力も検討している。

■「心臓リハビリテーションヨガクラス」

事業主：宇都宮 明美　開催日：全 51 回　参加人数：321 名

聖路加国際病院心血管センターの心臓リハビリテーションを終了した患者の 20 名を対象に全 51 回のクラスを開催、延べ321 名が出席した。クラスは１回７５分で、呼吸法や瞑想法、ストレッチや心疾患患者でも安全なヨガポーズで構成した。

また評価方法として、SF36 を用いて QOL 評価を実施した。３ヶ月毎に 50%以上出席した患者を対象に評価をした。対象者数は、３ヶ月修了者が１６名、６ヶ月修了者が１１名、９ヶ月修了者が６名となった。コース開始前の全体の平均点は 76.8 点、３ヶ月・６ヶ月・９ヶ月修了者の平均点はそれぞれ、75.6 点・78.7 点・80.6 点であった。ｔ検定を用いての比較では全体の平均点に 5%未満の有意差はなく、また各項目でもｔ検定による有意差が見られる項目は見られなかった。心血管疾患患者を対象とした先行研究ではいくつかの項目で有意的に低下していることから、心臓リハビリテーションヨガクラスに参加した患者が、参加していない患者と比較して QOL を維持できていると考察できる。

以上のことから、急性期、回復期の心臓リハビリテーションを卒業した患者の二次予防として有効なヨガクラスが提供できたと評価する。今後は更に有効性を示せる評価方法を用いる事が課題である。

【市民健康講座】

■「家で死ねるまちづくり「はじめの一歩の会」

事業主：山田 雅子　開催日：1 回／月　参加人数：36 名

はじめの一歩の会では一人暮らしあるいは日中独居となる高齢の方などへの訪問活動をボランティアとして行っている。会員であるケアマネジャーからの依頼を受け、散歩の付き添い、話し相手、図書館への同行、看取りのサポートなど相手のニーズに応じてさまざまな支援を行ってきた。

中央区での地域包括ケアを担う一つの団体として多くの人に存在を知ってもらいたいという趣旨で、こどもとためす環境まつりへの参加、会報の作成などを手掛けてきた。会員向けの研修としては中央区の地域包括支援センターの職員を講師に招きその活動についての講義を聴いた。また、青梅慶友病院の見学にも出向き、自分たちの老後の過ごし方について情報収集を行った。

３月 29 日開催した「互いに語る会」も今年で３回目を迎えるが、グリーフケアをテーマにして福田裕子氏に講師を依頼し、区内の有志が集い、家で死ねるまちづくりについて語りあった。

■「「自分の体を知ろう」おはなし会」

事業主：菱沼 典子　開催日：5 回／年　参加人数：125 名

子どもたちに体について教え、それを通して親世代にも体の知識の普及をねらいとして、紙芝居と絵本「わたしのからだ（8 分冊）」、「からだドックンドックン」、臓器Ｔシャツ等を用いて、おはなし会を開催した。この活動は 2003 年より開始し、教材の開発、おはなし会の実施に至り、普及に向けた本つくりにも取り掛かっている。また、普及活動のために次年度の NPO 法人の立ち上げを検討した。

おはなし会は１テーマ 20 分程度で、説明と体験（臓器Ｔシャツの分解、聴診器で心音を聞く、豆腐を脳に見立てた落下実験など）により学習し、その後親子で絵本を読むというプログラムを試みている。本年度は３か所で実施し、28 組の親子、延べ 125 名の参加者を得た。杉並中央図書館での開催は３年目になった。保育士や幼稚園教諭も対象としたが、会への参加は得られなかった。しかし、目黒区子育て支援部の保育園職員研修に取り上げられ、講師として参加する機会を得た。

☆聖路加看護大学からだ教育研究会ホームページ：http://karada-kenkyu.jimdo.com/

・特集１からだを探検しよう．学校給食，64（708），27-43，2013

・特集２からだのお話はじまりはじまり～！．学校給食，64（708），54-57，2013

■「聖路加市民アカデミー」

事業主：髙橋 恵子　開催日：10/24　参加人数：318 名

今年度の聖路加市民アカデミーは、「自分らしく生きるための選択」をメインテーマとし、少子高齢化進む時代に、私たちがよりよく生きるために、どのような選択をしたらよいのかを、参加者と一緒に考える機会を提供した。

プログラムの内容は、１）日野原重明先生（聖路加看護学園名誉理事長、聖路加国際メディカルセンター理事長）による特別メッセージ「生き方上手」、２）木村利人先生（早稲田大学名誉教授）による「自分らしくよりよく生きること」、３）さらに、渋田紀子氏、芦川侑美氏、高橋よしの氏による弦楽三重奏で幕を閉じた。会場は、定員を超える 318 名が参加し大盛況であった。

参加者の背景は、女性が７割以上で、60 代以上が７割以上を占めていた。また、参加者のアンケート結果からは、

「思い出に残る日になった」「元気をいただいた」「参加できてよかった」など、9割以上の方が満足したと回答し、「ずっと続けてほしい」「次回も期待しています」と、次年度の継続の声も多く寄せられた。

＜関連文献＞
・高橋恵子，牛山真佐子，山田雅子（2014）．2012 年度聖路加・テルモ共同研究事業「新健康カレッジ」の活動報告　－『聖路加市民アカデミー』と『カレッジセミナー』－，聖路加看護大学紀要，40，94 － 98.

■「新健康カレッジセミナー」

事業主：髙橋 恵子　開催日：9/7、11/9、1/11　参加人数：138 名

新健康カレッジセミナー２０１３では、メインテーマを「知って学ぶ　自分のからだ」と題して、一般市民が自分らしい生活を送るために、自分の健康状態を知り、今自分にできる健康生活を一緒に考える機会を提供した。カレッジセミナーは、［講座Ⅰ］上村昭博先生（聖路加国際病院　神経血管内治療科医員）による「なぜ脳出血が起こるの？～その予防と最新治療法～」、［講座Ⅱ］菱沼典子先生（聖路加看護大学　基礎看護学教授）による「なぜ骨粗鬆症になるの？　～骨のしくみと骨粗鬆症～」、［講座Ⅲ］西祐太郎先生（聖路加国際病院　循環器内科医長）による「なぜ高血圧は怖いの？　～狭心症と最新治療法～」という内容で開催した。 参加者の背景は、8 割以上が女性で、8 割以上が 60 代であった。参加者のアンケート結果では、7 割以上が分かりやすい内容と回答し、今後の講座の継続希望の声が多く寄せられ、市民の関心を寄せる活動であることが示唆された。

＜関連文献＞
・高橋恵子，牛山真佐子，山田雅子（2014）．2012 年度　聖路加・テルモ共同研究事業「新健康カレッジ」の活動報告－『聖路加市民アカデミー』と『カレッジセミナー』－，聖路加看護大学紀要，40，94 － 98.

■「中央区民カレッジ　まなびのコース」

事業主：川元 美里　参加人数：のべ 212 名

前期は 5 月 31 日～ 7 月 26 日の隔週金曜日に、後期は 10 月 3 日～ 11 月 28 日の隔週木曜日に聖路加看護大学 2 号館で「自分の体を知り、健康になるための新たな視点を学ぶ」というテーマで全 5 回の講座を本年度に 2 回開催した。軽いエクササイズやヨーガを通して、自身の心身の状態を改めて見つめなおし、また座学にて健康な生活とは何かを考える機会を提供した。受講生からは「体を動かせるのがよい」「役に立つ話をきくことができた」「いろんな人と会えるのがよい」という意見が寄せられた。各回の講師と内容は以下の通りであった。

【前期】		「自分の体を知って、健康に！」	
	5/31	自分をアピール～むくみ改善エクササイズですっきりきれいに～①	大木麻梨子
	6/14	自分をアピール～むくみ改善エクササイズですっきりきれいに～②	大木麻梨子
	6/28	すっきりヨーガ ～からだを楽に動かす仕組みを知ろう～①	花村　睦
	7/12	すっきりヨーガ ～からだを楽に動かす仕組みを知ろう～②	花村　睦
	7/26	のりっち・なおっちの健康講座	島内憲夫 大久保菜穂子
【後期】		「自分のからだを知って、健康な生活を！」	
	10/3	自分の生活を見つめなおして健康に！	島内憲夫 大久保菜穂子
	10/17	むくみ改善・からだスッキリ！　リンパエクササイズ‼①	大木麻梨子
	10/31	むくみ改善・からだスッキリ！　リンパエクササイズ‼②	大木麻梨子
	11/14	すっきりヨーガ～こころとからだをほぐしましょう～①	花村　睦
	11/28	すっきりヨーガ～こころとからだをほぐしましょう～②	花村　睦

■「中央区民カレッジ　シニアコース」

事業主：髙橋 恵子　参加人数：のべ 300 名

9 月 20 日～ 12 月 13 日の期間の金曜日、午後 2 時～ 4 時に、「今考えよう、自分の最期の過ごし方」と題して 10 回のクラスを中央区の築地社会教育会館において開催した。シニアコースは、自分らしい最期を迎えるための準備について、受講生それぞれが考える機会を提供した。受講生からは、「知らない知識を得られた」「自分の年齢には必要だった」「具体的に考えられるようになった」など、新たな学びの機会になった声が寄せられた。各クラスの内容と講師は以下の通りであった。

9/20	看取りの文化	梅田　　恵（緩和ケアパートナーズ）
10/4	超高齢化社会と現代と課題	山田　雅子（聖路加看護大学）
10/11	今から老いを考える	桑田美代子（青梅慶友病院）
10/18	中央区にある介護施設	吉田　千晴（京橋おとしよりセンター）
10/25	救急車で運ばれたら	宇都宮明美（聖路加看護大学）
11/15	最期の過ごし方を語り合おう	高橋　恵子（聖路加看護大学）
11/22	家で最期を迎えるということ	佐藤　直子（聖路加看護大学）
11/29	よりよい最期のための治療の選択	梅田　　恵（緩和ケアパートナーズ）
12/13	コースのまとめ	梅田　　恵（緩和ケアパートナーズ）

キャリア開発支援室

【ナーススキルアップ講座】

■「看護管理コンサルテーション」

事業主：井部 俊子　開催日：随時　参加人数：１名

聖路加看護大学「看護実践開発研究センター催しもの案内」や、2013 年度認定看護管理者ファーストレベル講習の修了時および大学院のクラスなどにおいて、「看護管理コンサルテーション」の活用をＰＲし、1名の来談者があった。

■「緩和ケアコンサルテーション」

事業主：林 直子　開催日：予約制　参加人数：0 名

今年度の利用申し込みはなかった。今後も引き続き、がん緩和ケアに携わる看護者に本事業を活用してもらえるよう、広く参加を呼びかけ継続して取り組んでいく予定である。

■「在宅看護コンサルテーション」

事業主：山田 雅子　開催日：予約制　参加人数：1 名

９月 13 日に都内介護老人保健施設に勤務する看護職が、当センター事業のひとつである「退院調整看護師養成プログラムと活動支援」に参加する前に課題整理の目的で利用した。

■退院調整看護師養成プログラムと活動支援

事業主：山田 雅子　開催日：1 コース（5 回）／年　参加人数：のべ 245 名

今年で６年目となるこのプログラムであるが、今年も定員を上回る申し込みがあり、退院調整看護師支援に対するニーズの高さが伺えた。

今年の受講者の平均退院調整経験年数は 2.2 年（1 か月～ 7 年）で、1 年未満の者が 12 名であった。プログラムの内容は、１日目は組織における退院調整看護師の役割と課題について考え、２日目は退院調整に伴う倫理的ジレンマとその解決方法を考える、３日目は新しく、在宅療養者に対する介護保険制度を活用した事例の検討を取り入れた。４回目は合意形成を目指した多職種によるカンファレンスの運営方法、５日目は地域完結型医療提供体制についてであった。

各内容については事前課題を設け、予め受講者の施設における状況や課題を認識した上で、講義やグループワーク、ロールプレイを通して理解を深めてもらうようにした。最終日には４８名が受講修了証を受け取り、自施設で取り組んでいくための課題と仲間を見つけることができた。終了後のアンケートでは、47 名（96%）が研修に対して「大変満足している」もしくは「満足している」と答え、32 名（68%）が退院調整についてさらに学びを深めたいかに対して「とても思うと」と答えた。本プログラムで学びを深める満足感を得るだけでなく、さらに学びを続けていくことのモチベーションを上げることにも寄与できたと考える。

■「精神看護事例検討会」

事業主：萱間 真美　　開催日：４回／年　参加人数：81 名

精神科領域の疾患や状態にある人への看護師・保健師の関わり方について、実際の事例をもとに、話し、学びあい、支えあう場を作ることを目的とし、訪問看護師・保健師を対象とした事例検討会と、精神看護専門看護師を対象とした事例検討会を実施した。

訪問看護師が、精神疾患をもち地域で生活する人を支えていくなかで、利用者の病状が変化したり、支援の見通しが見えにくくなったりと、困難な状況に出会うことがある。そのような事例を通じ、支援者が話し合うことで、互いに支えあい、学びあうことができる。本年度は、訪問看護ステーション、病院の訪問看護師、精神保健福祉士、行政の保健師などの参加があり、活発な意見交換がおこなわれた。看護職が他職種とどのように協働していけばよいかという可能性についても話し合う機会となった。

専門看護師の場合も同様に、病棟看護師が対応に苦慮している患者に対し、直接的な支援と間接的な支援をどのように行えばよいかなど、同じ立場の専門看護師同士が共に考え、支えあうことのできる事例検討を行っている。

■「がん看護事例検討会」

事業主：林 直子　開催日：2 回／年　参加人数：2 名

1 回につき 2 時間、参加者が臨床で受けもつ、複雑な問題をもつがん患者の事例を持ち寄り、事例の問題解決を図るがん看護実践について、参加者とがん看護学の教授ならびにがん看護専門看護師であるファシリテーターが、ディスカッションを行った。

参加者は本学がん看護専門看護師教育課程の修了生であった。課程修了後、所属施設での自己の役割開発や臨床実践での専門職としての取り組みについて情報共有を行った。

参加者は、事例検討会を通し自己の看護実践を振り返り、意見交換をするスキルを養うとともに、高度看護実践者としての役割を意識する機会になったと話していた。参加者は本検討会参加後に、日本看護協会の専門看護師認定審査に合格している。

■「英文献を読もうパートⅠ」

事業主：園城寺 康子　開催日：前期 5 回、後期 5 回　参加人数：8 名

メジカルビュー社発行の『看護英語読解 15 のポイント』を基本テキストとして使用。各回 1Unit を選択し、テープを聞き、複雑な構文と正確な内容把握を中心に授業を展開した。受講者に個人的に訳読してもらい、訂正することにより、かなり個人的に指導できたと思う。また受講者の専攻や興味による希望もあり、Time や Asahi Weekly などから選んだ医療系教材も適宜使用した。例年どおり、今年度も英語の学習法に関しては、直読直解の方法や実践的学習方法も紹介した。今回は前後期とも、大学院修士課程志願者が多かったので、大学院試験対策として、修士課程の試験問題の一般的傾向の分析や対策なども加味した。内容解読速度を上げる方法や、医療系用語の習得の重要性などを特に強調して説明した。

受講者は専攻分野など様々であったが、基礎レベルは上昇してきた感があり、小テストなども使用したが、相互に刺激し合い非常に真剣に取り組んでいた。

また、この講座が＜英文献を読もう！＞パートⅡへの導入となるように設定したためか、パートⅡに継続して進んだ受講生もあった。

■「英文献を読もうパートⅡ」

事業主：田代 順子　開催日：7 ～ 8 月に 5 回　参加人数：4 名

2013 年は、1 月からの受講者が 1 名のみであったため、開講をとりやめ、7 月開講の講座のみ開講した。7 月開講は４名で、全員今年度あるいは近々に大学院受験を予定している方々であった。

受講者は、大学院受験予定者がほとんどであったので、受講態度は積極的であり、例年どうり、修了時は、全受講生とも、５回受講した受講者は全員基礎力が上がり、問題なく教材の英語を読むことが出きる力が付いたと評価している。聖路加国際大学を受験した方は、３名おり、２名合格した。

課題は、昨年同様、受講生の数が年々減少し、予定参加人数の 4 割程度であることである。望床での関心で Evidence-based Practice を学びたい受講目的の受講者がほとんどおらず、全員、入試準備等であった。この講座の評価として、受講生のニーズを満たしている。加えて、受講生の教材の Evidence-based practice に関する理解を深めることができたとの評価もあった。講座としては、昨年も課題にしたが、大学院入試対策のみでなく、より広く、ＥＢＮに興味を持ってもらうクラスにする必要性がある。

■不妊症看護認定看護師ポストコース

事業主：森 明子　開催日：1 回／年　参加人数：68 名

今年度は「出生前診断の新しい動向と正しい理解」をテーマとした講演とテーマ別のグループ・セッションをもった。グループ・セッションのテーマは認定看護師からの聞き取りに基づいた4つのテーマを事前に知らせ、希望のテーマでディスカッションをした。

参加後のアンケート（回答者数 47 名）では、講演内容については「とても良かった」「良かった」と答えた者が 93.6%で、「あまり良くなかった」「良くなかった」と回答した者はいなかった。グループセッションは「とても良かっ

た」「良かった」と答えた者が 89.2%であった。グループセッションが良かった理由として、他施設との情報交換、悩みの共有があげられていた。「あまり良くなかった」「良くなかった」と回答した者はいなかったが、他のセミナーへ参加したい等の理由で午後は参加しなかった者が 25 名だった。

全国の不妊症看護認定看護師のうち約半数が参加し、参加率としては良好といえる。大きな理由としては学会の前日に同じ会場で行われたことが考えられる。ほとんどの者が次回も参加したいと回答している。次回以降も開催日時や場所を配慮し、内容については参加者の意見と不妊症看護の発展に寄与する講座の企画・開催に努めたい。

■「がん化学療法看護認定看護師スキルアップセミナー」

事業主：林 直子　開催日：1 回／年　参加人数：99 名

主にがん化学療法看護師を対象に継続教育の場として、最新の動向を学ぶとともに、セミナーを通じて認定看護師間の交流を図ることを目的とし、文部科学省がんプロフェッショナル養成基盤推進プランによる支援を受け 2012 年度より開催している。また本セミナーでは、本学認定課程卒業生の各期世話人が運営関係者とし協働することで、研修内容に参加者が認定看護師として求めるニーズが反映されやすいという特徴を持っている。また卒業生にはセミナー企画・運営のノウハウを学ぶ機会としての意味も持ち、本年度は 1 期～ 5 期卒業生世話人計 12 名が企画運営メンバーとして参加した。

本年度のセミナー内容は全 3 部構成とし、第 1 部では「がん化学療法看護認定看護師の資格更新」について、第 2 部では「最新のトピックス：ASCO2013 肺がん治療の最新と個別化医療」、「がん化学療法中の食と栄養の QOL- 味覚障害・粘膜障害に焦点を当てて -」の 2 部構成で実施した。参加者のアンケート集計結果では、今後の看護実践に活かせる内容であったと高評価であり、実際に 2012 年度参加者の 74%がセミナー研修内容について実際に実践で役立っていると回答している。

■訪問看護スキルアップセミナー

事業主：山田 雅子　開催日：4 回／年　参加人数：49 名

本事業は認定看護師のフォローアップのために行っている事業で、今年で４年目になる。

本年度は各回のテーマを①褥瘡管理②緩和ケア③安全管理④家族看護とした。参加者は各回のテーマに合わせて各自で実践事例を持ち寄り、事例検討を行った。検討内参加者は本センターの認定看護師教育課程訪問看護コースの修了生がほとんどであった。

終了後のアンケートでは 90%以上がセミナーは有意義であった、今後の活動に活かされる内容であったと回答した。自由記載では「ほかの人の意見は自分の見えていない部分を教えてくれる」、「1 つの事例を掘り下げて考え、紙に書くことにより整理ができた」という内容が見られた。本セミナーは認定看護師としてのスキルアップの場としてだけでなく、修了生同士の交流や互いの活動に助言し合う様子も見られ、認定看護師としての活動支援につながっていると感じている。本センターの修了生も 100 名を超えており、教育開始から 6 年を迎えているため、今後はより参加者が中心となって、互いに学び合い、活動を相互に支えるようなスキルアップセミナーを開催出来ると考えている。

■「看護管理塾」

事業主：井部 俊子　開催日：10 回／年　参加人数：620 名

全10回シリーズ。回ごとにテーマを設け運営した。テーマに沿ってワールドカフェ形式でグループワークを行い、専用サイトなども使用して参加者同士の情報の共有、次回へのフィードバックなどに活用した。

	日　程	時　間	内　　容
第1回	5 月26日（日）	14：00 ～ 17：00	序章・第一章　出会い
第2回	6 月15日（土）	14：00 ～ 17：00	第二章　マネジメントに取り組む
第3回	7 月13日（土）	14：00 ～ 17：00	第三章　感情の源泉を扱う
第4回	9 月21日（土）	14：00 ～ 17：00	第四章　効果的な会議
第5回	10月26日（土）	14：00 ～ 17：00	第五章　人の強みをみつける
第6回	11月16日（土）	14：00 ～ 17：00	第六章　イノベーションを起こす
第7回	12月 8 日（日）	14：00 ～ 17：00	第七章　人に仕事を与える・任せる
第8回	1 月18日（土）	14：00 ～ 17：00	第八章　仕事の意義を考える
第9回	2 月15日（土）	14：00 ～ 17：00	第九章　信頼できる仲間
第10回	3 月15日（土）	14：00 ～ 17：00	第十章　やる気にさせる職場

■「ELNEC-J 聖路加～すべてのナースのためのエンド・オブ・ライフ・ケア～」

事業主：山田 雅子　開催日：4 回／年　参加人数：のべ 94 名

本コースの特徴は、ELNEC を日本に導入した際に尽力したメンバーが講師となっている点であり、指導者の学び直しや認定看護師あるいは看護管理者講習を終えた看護職が教授方法等についても学ぶ場となっている。

今年度は 2 回開講した。8 月 31 日、9 月 1 日に開催した第 1 回目の参加者は 16 名で、3 月 7 日、8 日に開催した2回目は31 名が参加した。参加者は病棟勤務の看護師だけでなく、訪問看護師や退院調整にかかわる看護師、老人介護施設の看護師など様々な現場で働く看護師が集まったため、グループワークでは様々な視点からの意見を参加者同士で出し合い、様々な価値観に触れながら進めることができた。概ね参加者の満足度は高く、その目的を達成できていると考えている。次年度は、ELNEC-J 指導者の人数が少ない東北（福島県）に出張して本プログラムを展開する予定である。

■「聖路加看護大学・パラマウントベッド株式会社　看護教育共同事業クリティカルケア・シミュレーション教育プログラム SCC セミナー」

事業主：宇都宮 明美　開催日：9 回／年　参加人数：のべ 88 名

Ⅰ　運営

聖路加看護大学とパラマウントベッド株式会社との共同事業として運営している。

Ⅱ　プログラムの特徴

2012 年度から開催しているベーシックレベルを対象とした 3 プログラム（循環管理、呼吸管理、人工呼吸器装着患者の呼吸管理）に加えて、今年度は、新たに 3 つのプログラムを開発し実施した。ひとつは、エキスパートレベルを対象としたプログラムで、人工呼吸器装着患者のウイニングプロセスの理解と管理を目的とした。残りの二つはテクニカルコースとして口腔ケアと人工呼吸器設定の理解と技術習得を目的とした。各プログラム共通の特徴は、デブリーフィングで行うポジティブフィードバックと、高度シミュレーターを使用して実践を繰り返すことによる技術の向上促進である。また、全員が参加できるセミナー構成になるよう、1 グループ 8 名を上限とし、高機能シミュレーターを 2 体、インストラクター各 1 ～ 2 名で対応している。今年度は参加希望人数が増加したため、上限を 24 名として 3 グループ構成とし、医療機器を用いたハンズオンセミナーのブースを増設した。

今年度、各プログラムの開催回数はベーシックコースが6回（循環管理2回、呼吸管理 1 回、人工呼吸器管理 1 回）エキスパートコース 1 回、テクニカルコースが2回であった。

Ⅲ　受講状況

受講者アンケートには、全員が他のコースの受講を希望していることが示されている。また 10 段階評価で平均 8 点以上の評価が得られている。

Ⅳ　今後の課題

今後は、開発中のプログラムの開催と、受講者人数増員につながるコース運営を課題としている。

■「日野原重明先生指導下　ナースのための高級診察術」

事業主：山田　雅子　開催日：17 回／年　参加人数：1145 名

本コースでは、診察術に加え医師が日頃の診察の中で大事にしているポイントと経験知を知ることを通して、身体の機能ごとに診察に関する知識を深め、それを統合することによってより具体的なフィジカルアセスメント技術を学ぶという特徴がある。2013 年度は日野原重明名誉院長を始め各分野の第一線で活躍する経験豊富な医師を講師に迎え、17 もの詳細な分野を設定しのべ 1145 名が参加した。内容にはハーベイでの心音聴診実習や小児診療のロールプレイ、3D ソフトを使用した骨格確認、動画にて最新の手術手技や術式を学ぶなど、座学以外のアクティブラーニングも取り入れ、毎回 2 時間 30 分以上の時間をかけたクラスを開催している（開催分野・内容・講師に関しては下記参照）。

参加者は病院看護師以外に、訪問看護ステーションや老人介護施設の看護師、学校教員など様々な現場で働く看護師が集まった。またコースの趣旨に賛同した医師や鍼灸師など他医療職種の参加もあり、看護師が診察術を身につけることの重要性を学びながら多職種での意見交換を行う事もできた。本コースを通して看護の基本ともいえるフィジカルアセスメントを徹底して学ぶことにより、自己の基礎能力を高めながら臨床での実践にすぐに生かす技術を学ぶことができ、概ね参加者の満足度は高かった。

	実施日時	内　　容	講　師
1	2013/9/24 18：00-20：30	診断術について 看護師が診察、診断を学ぶ意義 問診・身体診察術・バイタルサイン	日野原重明
2	2013/10/1 18：00-20：30	電解質と血液ガス 血液ガス・体液・脱水・脈拍と血圧	日野原重明
3	2013/10/8 18：00-20：30	電子カルテとPOS POSとは	渡邉　　直
4	2013/10/15 18：00-20：30	代謝 糖尿病	門伝　昌己
5	2013/10/22 18：00-21：30	脈拍と心音 心音の聴診（講義・演習）、ハーベイ実習	久代登志男 日野原重明
6	2013/10/29 18：00-20：30	眼科 目の異常から看る疾患予測・診断 視力、眼圧、眼底測定、緑内障、眼底出血、近視・遠視・乱視	大越貴志子
7	2013/11/5 18：00-20：30	女性生殖系 解剖と生理、病歴・健康増進とカウンセリング 診察の技術・所見の記録、超音波の診断、会陰切開と縫合	山中美智子
8	2013/11/12 18：00-20：30	小児 病歴の取り方、全身の見方・診察の仕方 身体測定の方法とスクリーニングテスト	真部　　淳
9	2013/11/19 18：00-20：30	内分泌 下垂体・甲状腺・副腎・膵臓	門伝　昌己 日野原重明
10	2013/11/26 18：00-20：30	皮膚 病態と原因を推測する 炎症・感染症・悪性腫瘍・アレルギー 沈着症・代謝異常	衛藤　　光 日野原重明

11	2013/12/3 18：00-20：30	耳鼻科 耳鼻科の診察術、耳・鼻の異常から看る疾患の予測	柳　　清 日野原重明
12	2013/12/10 18：00-20：30	消化器 医療面接と身体診察・消化器疾患の主要症状・腹痛	藤田　善幸 日野原重明
13	2013/12/17 18：00-20：30	脳神経系 神経学的所見の構成要素 脳神経・運動機能・共同運動・歩行障害・反射 神経診察 しびれ・感覚障害・失語症 軽い麻痺の発見と小脳性失調・歩行障害 緊急性のある神経疾患とCT/MRI 脳梗塞の急性期診断、重症脳梗塞患者の所見 横断性脊髄障害、神経・筋疾患による呼吸不全 認知症	竹見　敏彦
14	2014/1/7 18：00-20：30	腎臓・透析・移植 体液異常・糸球体濾過と尿細管再吸収 慢性腎臓病・腎不全	長濱　正彦 日野原重明
15	2014/1/14 18：00-20：30	泌尿器・生殖系 解剖と生理、重要な身体所見・重要な検査 主な疾患の診断法、ダヴィンチロボットについて	服部　一紀 日野原重明
16	2014/1/21 18：00-20：30	整形外科 筋骨格系の評価・病歴、健康増進とカウンセリング 特定の関節に診察：解剖と生理、診察の技術 所見の記録、骨折などのレントゲンの見方	黒田　栄史 日野原重明
17	2014/1/28 18：00-20：30	呼吸器 呼吸器とその役割・主な呼吸器症状とその捉え方	蝶名林直彦 日野原重明

【認定看護管理者講習･認定看護師教育課程】

■認定看護管理者ファーストレベル講習

事業主：井部　俊子　開催日：2013 年 8 月 19 日～ 9 月 20 日　参加人数：89 名

ファーストレベル講習には 94 名の出願者があり 94 名を合格とした後、5 名の辞退者があり 89 名が受講した。出願者の年齢は 30 代 37 名、40 代 50 名、50 代 2 名、また、看護師長、主任または師長・主任相当の職位が約 50 名であった。地域別でみると、東京都 46 名、神奈川県 13 名、千葉県 13 名であり関東地域が大半であった。

科目構成は、看護管理概論、看護情報論、グループマネジメント、看護専門職論、ヘルスケアシステム論、看護サービス提供論、人材育成論の 7 科目である。本講習では、各領域の専門家による講義に加え、演習として TBL（Team Based Learning）での学習形態も取り入れ、受講生の積極的参加とともに、論理的思考力、対人関係能力、記述・発表能力の向上につなげている。今年度は昨年度に引き続き 1 科目の科目評価をレポート、残り 6 科目を試験で行い、コース終了後の受講生の負担を軽減した。

受講生によるプログラム評価では、講義内容、講師、講義資料については、いずれの科目でも約 80%を超える受講生が「適切だった」または「どちらかといえば適切だった」と評価した。またグループ学習、TBL での演習についてはすべての科目で「効果的だった」、「どちらかといえば効果的だった」が 80%を超えた。

なお本講習は、日本看護協会認定看護管理者制度 ファーストレベル講習の教育機関として認定を受け、実施している。

■認定看護師教育課程（不妊症看護コース・がん化学療法看護コース・訪問看護コース）

事業主：山田　雅子　開催日：2013 年 6 月～ 2014 年 2 月　　参加人数：59 名

認定看護師とは、複雑・多様化する社会や医療状況の中で、患者の健康問題を多角的に捉える視点を持ち、特定の分野において質の高い医療サービスを提供することができる看護師である。本学では、①不妊症看護・②がん化学療

法看護・③訪問看護の３つの特定分野における認定看護師教育を行い６年が経過した。これまでの修了者の累計は、不妊症看護 75 名、がん化学療法看護 159 名、訪問看護 127 名となった。次年度はそれぞれ 14 名、13 名、20 名のあたらいい研修生を迎えることが決まった。

　来年度に組織改編を控え、今後の認定看護師教育課程の在り方については引き続き意見交換を行い、世の中に必要とされる分野の質の高い認定看護師の排出に向け、尽力することはこれまでどおりである。

■「研究相談」

事業主：八重　ゆかり　開催日：随時　参加人数：39 名

研究センターにおける研究活動支援室の業務として 2010 年度より開始した本事業は、今年度で４年目となった。2013 年４月から 2014 年３月までの１年間における相談者数は 39 人（教員３人、院生 36 人；のべ相談回数 86 回）、相談総時間数は 153 時間であり、１ヶ月あたりの平均相談回数 7.8 回、平均相談時間 13.9 時間であった。昨年度（相談者数 19 人、のべ相談回数 37 回、１ヶ月あたりの平均相談回数 6.2 回、平均相談時間 6.2 時間）と比べいずれの数値も約２倍の実績となった。博士前期課程学生による相談の増加が今年度の実績につながったと考えられる。相談内容としては、研究テーマの絞り込みに対する支援と結果の解析方法に関する相談が主であり、この傾向は例年と同様であった。研究を進めていく過程には、研究テーマの絞り込み、研究デザインの構築、研究実施と解析という段階があるが、第二段階である研究デザイン構築に対する支援も充実させることが今後の課題である。

なお昨年度より、本学院生の有志グループとともに Journal Club を開催しているが、今年度は昨年度の６回よりも多い８回開催することができた。運営も学生主体が定着してきており、来年度も継続する予定である。

■「文献検索～準備体操」

事業主：廣瀬 清人　開催日：3 回／年　参加人数：25 名

看護文献を探すコツと文献データベースを検索するステップに関して、利用頻度の高い医中誌 web,PubMed を用いて説明した。

講座に先だって、ウェブ上で医中誌 web が上手く検索できなかった事例を示し、どうしたら上手くいくかを考えてくる事前課題を出した。文献データベースの検索ステップを紹介した後、事前課題と同じ課題を再度実施することで、文献検索のステップに対する理解を深めることを狙った。

講座内容は、２つのデータベースの基本操作方法、データベースの選び方、上手く検索できない場合にどうしたらよいのか、キーワードの探し方、データベースに適した検索方法、文献を探すコツ等であった。

１人１台のパソコンを用意して、画面を操作しながら課題を解き、質疑応答を交えながらデータベース操作を実習した。

今年度は３月末に開催したことで、例年より多くの参加者が集まった。入学直前の開催が適切との評価であったため今後も同時期の開催を予定している。

■「臨床疫学研究入門」

事業主：八重　ゆかり　開催日：5 回／年　参加人数：54 名

本講座は、ランダム化比較試験などの臨床疫学研究デザインの知識を身につけることにより、量的研究の研究計画において適切な研究デザインを選択し、また研究デザインに即した具体的研究方法を検討できるようになることを目指し、以下の内容を５回の講義シリーズとして実施した。

第１回　Introduction to Clinical Epidemiology（EBM）
第２回　パラメトリック検定の基礎と P 値について
第３回　ランダム化試験の計画書を読む
第４回　ランダム化試験を読む　その１
第５回　ランダム化試験を読む　その２

本講座では、第２回において統計学検定の基礎であるパラメトリック検定と P 値の求め方および解釈の仕方について解説し、統計学的検定の意味を理解することを目指した。また第３回にはランダム化試験のプロトコル（試験計画書）の実例を読むという内容を取り入れることにより、臨床疫学研究デザインの知識を身につけるだけでなく、研究者としての実践（研究計画書の作成）に、より役立つコース内容とした。参加者登録者内訳は、本学教員３人、修士課程学生 13 人、博士課程学生３人、学外参加者２人であった。

来年度は、観察研究デザインの内容も盛り込むとともに、基礎的な統計学検定手法に関する内容を増やす予定である。

2013 年度 学生の実習および研究・研修の場としてのセンター事業等活用状況

活用したセンター事業等	担当者	学生種別と学年	科目名または研修名	利用者数
るかなび	大橋久美子	PCC概論	学部1年生・学士編入17回生	98名
		コミュニケーション実習	学部1年生	1名
		PCC概論（闘病記文庫）	学部1年生・学士編入17回生	153名
	山田　雅子 佐藤　直子 諏訪部高江	認定看護師教育課程（臨地実習）	訪問看護コース受講生	3名
		認定看護師教育課程（総合演習）	訪問看護コース受講生	26名
リンパ浮腫ケアステーション	林　　直子	がん看護学・緩和ケア演習Ⅱ	修士課程がん看護･緩和ケア上級実践コース1年生	3名
	金井　久子	乳がん看護認定看護師教育課程臨地実習	静岡県立がんセンター乳がん看護認定看護師教育課程研修生	1名
	金井　久子 石丸　雅博	中四国がんプロ病院見学実習	愛媛大学附属病院所属薬剤師・看護師	各1名 （計2名）
多世代交流型デイプログラム 聖路加和みの会	亀井　智子	N4　ゼミナール老年看護学	学部4年	1人×3回 （延べ3名）
	亀井　智子	厚労科研調査（PCC事業の利用者を対象とした調査）	研究協力者ほか	27人(協力者) 研究者は1名
転倒骨折予防実践講座 SAFETY on! プログラム	亀井　智子	N4　看護研究Ⅱ	学部4年	1人×5回 延5人
	亀井　智子	早稲田大学の研究（PCC事業の利用者を対象とした調査	研究協力者ほか	45人(協力者) 研究者は1名
＜英文献を読もう！＞パートⅠ ～基礎編～	園城寺康子		大学院修士課程志願者、大学院在籍者	10名
乳がんサポートプログラム	金井　久子 細田　志衣	乳がん看護認定看護師教育課程臨地実習	静岡県立がんセンター乳がん看護認定看護師教育課程研修生	1名
	菱沼　典子	修士論文の研究協力者募集	聖路加看護大学修士課程大学院生	1名
	中山　和弘	博士論文予備研究の研究協力者募集	聖路加看護大学博士課程大学院生	1名
天使の保護者ルカの会	蛭田　明子／ （太田　尚子）		聖隷浜松病院　助産師	3名
	蛭田　明子	地域連携母子保健実習Ｂ	浜松医科大学学部4年生	1名
		家族発達看護論Ⅱ	聖路加看護大学学部4年生	1名
			聖隷浜松病院　助産師	1名
ルカ子・サロン	森　　明子	不妊症相談・教育：集団指導	認定看護師教育課程不妊症看護コース(6期生)	13名
	川元　美里	不妊症相談・教育：個別相談	認定看護師教育課程不妊症看護コース(6期生)	13名
ポルカの会	有森　直子	看護ゼミナール（遺伝看護）	学部4年生	5人
		総合看護	学部4年生	1人

2013 年度 看護実践開発研究センター　運営委員会・専任研究員・研究センター事務課スタッフ

■運営委員会

センター長・WHOコラボレーティングセンター長	教授	有森直子
ＰＣＣ実践開発室長	教授	亀井智子
ＰＣＣ実践開発副室長	准教授	髙橋恵子
キャリア開発支援室長	教授	山田雅子
WHOコラボレーティングセンター事務局担当	教授	田代順子
研究活動支援室長	准教授	八重ゆかり

■専任研究員

教授	有森直子
教授	山田雅子
准教授	八重ゆかり
准教授	髙橋恵子
助教	川元美里
助教	細田志衣
助教	前田邦枝
助教	佐藤直子

■研究支援室スタッフ

課長	高木裕也
係長	平良智子
	福田昌（広報室係長兼務）
	田口瞳
	中山令子（10月1日～）
	建川萌（10月1日～）

編集後記

RCDNP 様

10 年間の豊かな学びを

ありがとうございました。

Ⓜ

St. Luke's College of Nursing
Research Center for
Development of
Nursing Practice

2013 年度聖路加看護大学
看護実践開発研究センター報告書

2014 年 5 月 28 日発行

発行者：聖路加看護大学看護実践開発研究センター

発行所：瀬味証券印刷株式会社